

1. スマート農業の死角

スマート農業については別の講義でも学んでいるが、これを全国の農家に適応させ、実行していくにはあまりにも壁がありすぎるように感じていた。そのため今回この記事を読んで内容に非常に共感し、またスマート農業の課題についてより理解を深めることができたように思う。

コスト・タイムパフォーマンスを求める昨今の流れや、少子高齢化を背景とした効率化に伴い、スマート農業はあちこちでもはやされてきたものの、上手く運用できているのはほんの一部の大規模な農場を持つ農家に留まっている。その理由のひとつとして、農林水産省が日本の農家の現状を把握しておらず、加えて今のスマート農業を推進することで日本の農家がどのように変化するかを理解していないからだろうと考えられる。この状態を解決してこなかったがゆえに、「2025年までには農業の担い手のほぼ全員がデータを活用できるようにする」という目標はほぼ確実に達成できない状況なのだろう。

私はスマート農業を進める役人側こそ、スマート農業の効果や課題点を把握し、また食料生産を上げることばかりにとらわれず各農村地帯の振興や存続にも目を向けていくべきであると考える。

日本の農業は全国的に画一化されているわけではない。斜面のある中山間地域での農業や、ビニールハウスの農業、露地栽培の農業、稲作や畑作など、日本の農業は非常に多種多様である。それを役人が理解し、すべてに同じ規格を対応させるのではなく、またすべてが大規模なものだと考えることなく、各地域の特徴や課題に合った真のスマート農業を進めていくべきである。これは畜産や酪農等にも同様のことが言えるだろう。

さらに資料にも書いてある通り通信インフラを整備することも重要であろう。しかし農村地帯に整った通信を通していくことはかなり費用のかかる問題である。さらにその通信を今後長く管理していくとなると一時的なお金では賄えない。加えてこれを一部地域だけではなく全国的に行うとすると、莫大な費用がかかることだろう。

この件についても、国は「農村地帯から都市部への移住を呼びかけて通信を通すことをやめる」というような選択をするのではなく、「農村地域の通信を整える」という方向に動いて欲しいと考える。農村地域に通信を通さないとすると農業が衰退する他、憩いの場の消失、遷移の進行などが起こってしまいかねない。そういった側面も加味して政策を行うべきであると考える。

2. ウイズ生成 AI の時代を生きる

ChatGPT は公開後瞬く間に全世界に広まったと同時に、この機能と今後どのように付き合っていくべきかという話題も重視されてきたように思う。世の中には ChatGPT を使ってレポートを書く人もいることから、この機能が非常に優秀で、かつどの分野にも精通しているということがうかがえる。

私はこれまで ChatGPT をまともに使ったことがなく、その精度の良さをわからないうちにいたが、今回この記事を読んで ChatGPT のレベルの高さを痛感した。ここまでの説明が AI からでてくるのであれば、AI の得意分野は AI に任せた方が良好だろう。そして私たちは AI を上手く活用しつつも、自分たちの AI との関わり方を再度確認し直す必要があると考える。

AI の得意な知識のまとめや、要約、翻訳などの作業、業務や方針の提案などは、AI を活用すると生産性が格段に上がるだろう。それに対し正確性を問うものや、最新の情報の反映などはまだまだ AI にとって苦手な分野である。さらにインターネットで調べても入手できないような情報については自分で現地調査を行った方が良好。

もちろん AI を通して出た回答の真偽は人間側が確認しなければならないが、このような AI の得意分野・苦手分野を考慮した関わり方をすることができれば、私たちはより効率良く物事を進めることができるようになるだろう。

ただしここで重要なことは、こうした適切な距離感と利用方法を一人ひとりが理解し身に着けることであると考え。AI の情報を鵜呑みにし、頼り切ってしまう人が大勢いては、偏った情報ばかりが蔓延してしまいかねない。

そのためには義務教育の頃から AI との付き合い方を話し合い、大学では農業や IT 分野にとどまらず、専門分野ごとにどのような AI の活用方法があるのかを学ぶ必要があるのではないだろうか。こうすることでより良い AI との付き合い方が確立されていき、日本の農業や教育、福祉など様々な分野がますます発展していくことだろう。

ゆえに我々は一人ひとりが AI を排除しすぎず、また何もかも受け入れすぎないという付き合い方について再度見つめ直し、上手く実行していくべきだと考える。